

# Linux 版 VMware View Client の使用

2012 年 5 月

Linux 版 View Client

このドキュメントは新しいエディションに置き換わるまで、ここで書いてある各製品と後続のすべてのバージョンをサポートします。このドキュメントの最新版をチェックするには、<http://www.vmware.com/jp/support/pubs> を参照してください。

JA-000780-01

vmware®

最新の技術ドキュメントは VMware の Web サイト (<http://www.vmware.com/jp/support/pubs/>) にあります  
VMware の Web サイトでは最新の製品アップデートも提供されています。

このドキュメントに関するご意見およびご感想がある場合は、[docfeedback@vmware.com](mailto:docfeedback@vmware.com) までお送りください。

Copyright © 2012 VMware, Inc. 無断転載を禁ず。本製品は、米国著作権法および米国知的財産法ならびに国際著作権法および国際知的財産法により保護されています。VMware 製品には、<http://www.vmware.com/go/patents-jp> に列記されている 1 つ以上の特許が適用されます。

VMware は、米国およびその他の地域における VMware, Inc. の登録商標または商標です。他のすべての名称ならびに製品についての商標は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

**VMware, Inc.**  
3401 Hillview Ave.  
Palo Alto, CA 94304  
[www.vmware.com](http://www.vmware.com)

**ヴイエムウェア株式会社**  
105-0013 東京都港区浜松町 1-30-5  
浜松町スクエア 13F  
[www.vmware.com/jp](http://www.vmware.com/jp)

# 目次

1	Linux 版 VMware View Client の使用	5
	インストールと構成	6
	Linux クライアントのシステム要件	6
	サポートされている View デスクトップのオペレーティングシステム	7
	View Client 向けの View 接続サーバの準備	7
	Linux 版 View Client のインストール	8
	エンドユーザーの証明書確認の構成	8
	クライアントでの FIPS モードの有効化	9
	PCoIP クライアントサイド イメージ キャッシュの構成	9
	サーバ接続とデスクトップの管理	10
	初回の View デスクトップへのログイン	11
	View Client の証明書チェック モード	12
	デスクトップの切り替え	13
	デスクトップからのログオフまたは切断	13
	デスクトップのロールバック	14
	Linux システムでの Microsoft Windows デスクトップの使用	15
	機能サポート一覧	15
	国際化	16
	キーボードとモニタ	16
	テキストのコピー アンド ペースト	17
	View Client のトラブルシューティング	17
	デスクトップのリセット	17
	View Client のアンインストール	17
	View Client のコマンドの使用方法と構成設定	18
	View Client の終了コード	24
	USB デバイスのリモート デスクトップへのリダイレクト	25
	インデックス	27



# Linux 版 VMware View Client の使用

このガイド『Linux 版 VMware View Client の使用』では、データセンター内の View デスクトップに接続するために、Linux クライアントシステムに VMware View™ ソフトウェアをインストールして使用方法について説明します。

このドキュメントには、Linux 版 View Client をインストールおよび使用するためのシステム要件と手順が記載されています。

この情報は、Linux クライアントシステムを含む VMware View の配置を設定する必要がある管理者を対象としています。これらの情報は、仮想マシンテクノロジーおよびデータセンターの運用に精通している経験豊富なシステム管理者向けに記述されています。

---

**注意** このドキュメントは、VMware が Ubuntu 用に提供している Linux 版 View Client も対象としています。また、VMware のパートナー数社が、VMware View の配置用のシンクライアント デバイスを提供しています。各シンクライアント デバイスで使用可能な機能およびサポート対象のオペレーティング システムは、ベンダーおよびモデルと、企業が採用する構成によって決定されます。シンクライアント デバイスのベンダーおよびモデルの詳細については、VMware Web サイトから入手可能な『[VMware 互換性ガイド](#)』（英語版）を参照してください。

---

## ■ インストールと構成 (P. 6)

Linux クライアント向けに View の展開をセットアップするには、Linux クライアントのシステム要件を満たし、Linux 用 View Client をダウンロードしてインストールし、Linux クライアントシステム上でセキュリティとパフォーマンスの設定を構成します。

## ■ サーバ接続とデスクトップの管理 (P. 10)

View Client を使用して View Connection Server またはセキュリティ サーバに接続し、View デスクトップにログインするか View デスクトップからログオフします。トラブルシューティングする場合にも、割り当てられている View デスクトップをリセットし、チェックアウトしたデスクトップをロールバックできます。

## ■ Linux システムでの Microsoft Windows デスクトップの使用 (P. 15)

Linux 版 View Client では、Windows 版 View Client に搭載されている機能の一部がサポートされています。

## ■ View Client のトラブルシューティング (P. 17)

View Client に関するほとんどの問題は、デスクトップのリセットまたは VMware View Client の再インストールで解決することができます。

## ■ View Client のコマンドの使用法と構成設定 (P. 18)

コマンドラインのオプションまたはそのオプションに相当する構成ファイルのプロパティを使用して、View Client を構成できます。

## インストールと構成

Linux クライアント向けに View の展開をセットアップするには、Linux クライアントのシステム要件を満たし、Linux 用 View Client をダウンロードしてインストールし、Linux クライアントシステム上でセキュリティとパフォーマンスの設定を構成します。

- [Linux クライアントのシステム要件](#) (P. 6)

Linux 版 View Client は、Ubuntu Linux 10.04 または 10.10 オペレーティングシステムを使用する PC にインストールできます。

- [サポートされている View デスクトップのオペレーティングシステム](#) (P. 7)

管理者は、ゲスト オペレーティングシステムを使用して仮想マシンを作成し、そのゲスト オペレーティングシステムに View Agent をインストールします。エンド ユーザーは、クライアント デバイスからこれらの仮想マシンにログインできます。

- [View Client 向けの View 接続サーバの準備](#) (P. 7)

エンド ユーザーが View デスクトップに接続できるようにするには、特定のタスクを管理者が実行する必要があります。

- [Linux 版 View Client のインストール](#) (P. 8)

エンド ユーザーは、View Client を開いて物理マシンから仮想デスクトップに接続します。Linux 版 View Client は Ubuntu 10.04 または 10.10 システムで動作し、Synaptic Package Manager を使用してインストールします。

- [エンドユーザーの証明書確認の構成](#) (P. 8)

たとえば、完全検証を常に実行するように、管理者は証明書検証モードを構成することができます。

- [クライアントでの FIPS モードの有効化](#) (P. 9)

クライアントが FIPS (連邦情報処理規格) 140-2 承認済み暗号アルゴリズムとリモート PCoIP 接続を確立するためのプロトコルのみを使うように構成プロパティを設定できます。

- [PCoIP クライアントサイド イメージ キャッシュの構成](#) (P. 9)

PCoIP クライアントサイド イメージ キャッシングでは、再送信を回避するためにイメージコンテンツをクライアントに保存します。デフォルトにより、この機能を使用すれば帯域幅の使用が抑えられます。

## Linux クライアントのシステム要件

Linux 版 View Client は、Ubuntu Linux 10.04 または 10.10 オペレーティングシステムを使用する PC にインストールできます。

View Client をインストールする Linux PC またはノート PC とその周辺機器は、一定のシステム要件を満たしている必要があります。

<b>モデル</b>	Intel ベースのデスクトップまたはノート PC
<b>メモリ</b>	最小で 2GB の RAM
<b>オペレーティングシステム</b>	32 ビット Ubuntu Linux 10.04 または 10.10
<b>View 接続サーバ、セキュリティ サーバ、および View Agent</b>	4.6.1 以降のバージョン 企業のファイアウォールの外部からクライアントシステムが接続する場合には、セキュリティ サーバを使用することを推奨します。セキュリティ サーバでは、クライアントシステムで VPN 接続が必要にはなりません。
<b>VMware View の表示プロトコル</b>	PCoIP または RDP

**PCoIP のハードウェア要件**

- SSE2 拡張命令に対応する x86 ベースのプロセッサ。800MHz 以上のプロセッサ処理速度。
- さまざまなモニタ セットアップをサポートするための、システム要件を超える RAM 空き容量。一般的なガイドとして次の式を使用してください。

$$20\text{MB} + (24 * (\# \text{ monitors}) * (\text{monitor width}) * (\text{monitor height}))$$

大まかなガイドとして、次の計算が使用できます。

- 1 台のモニタの場合: 1600 x 1200: 64MB
- 2 台のモニタの場合: 1600 x 1200: 128MB
- 3 台のモニタの場合: 1600 x 1200: 256MB

**RDP のハードウェア要件**

- SSE2 拡張命令に対応する x86 ベースのプロセッサ。800MHz 以上のプロセッサ処理速度。
- 128MB RAM。

**サポートされている View デスクトップのオペレーティング システム**

管理者は、ゲスト オペレーティング システムを使用して仮想マシンを作成し、そのゲスト オペレーティング システムに View Agent をインストールします。エンド ユーザーは、クライアント デバイスからこれらの仮想マシンにログインできます。

サポートされているゲスト オペレーティング システムの一覧については、VMware View 4.6.x または 5.x のインストール ドキュメントの「View Agent でサポートされるオペレーティング システム」を参照してください。

**View Client 向けの View 接続サーバの準備**

エンド ユーザーが View デスクトップに接続できるようにするには、特定のタスクを管理者が実行する必要があります。

エンド ユーザーが View 接続サーバまたはセキュリティ サーバに接続して、View デスクトップにアクセスできるようになるには、プールの設定およびセキュリティの設定を構成する必要があります。

- セキュリティ サーバを使用している場合、VMware では、View 接続サーバ 4.6.1 以降および View セキュリティ サーバ 4.6.1 以降の使用を確認することを推奨しています。View 4.6 以降の『VMware View インストール ガイド』を参照してください。
- クライアント デバイスに安全な接続を使用する予定で、その安全な接続が View 接続サーバまたはセキュリティ サーバの DNS ホスト名を使用して構成される場合には、この DNS 名がクライアント デバイスによって解決できることを確認します。

安全なトンネルを有効または無効にするには、View Administrator で [View 接続サーバ設定の編集] ダイアログ ボックスに移動して、[デスクトップへの安全なトンネル接続を使用する] チェックボックスを使用します。

- 仮想デスクトップ プールが作成済みであること、および使用予定のユーザー アカウントにこの View デスクトップへのアクセス権が付与されていることを確認します。デスクトップ プールの作成については、『VMware View 管理ガイド』を参照してください。
- View Client で、RSA SecurID または RADIUS 認証などの 2 要素認証を使用するには、View 接続サーバでこの機能を有効にする必要があります。RADIUS 認証は、View 5.1 以降の View 接続サーバで使用できます。詳細については、『VMware View 管理者ガイド』で 2 要素認証に関するトピックを参照してください。

## Linux 版 View Client のインストール

エンドユーザーは、View Client を開いて物理マシンから仮想デスクトップに接続します。Linux 版 View Client は Ubuntu 10.04 または 10.10 システムで動作し、Synaptic Package Manager を使用してインストールします。

### 開始する前に

- クライアントシステムがサポートされているオペレーティングシステムを使用していることを確認します。[\[Linux クライアントのシステム要件 \(P.6\)\]](#) を参照してください。
- クライアントシステムに管理者としてログインできることを確認します。
- RDP 表示プロトコルを使用して View デスクトップに接続することを計画している場合は、適切な RDP クライアントがインストールされていることを確認してください。[\[Linux クライアントのシステム要件 \(P.6\)\]](#) を参照してください。

### 手順

- 1 Linux ノート PC または PC で、[Canonical Partners] を有効にします。
  - a Ubuntu のメニュー バーで [システム] - [システム管理] - [アップデート・マネージャ] を選択します。
  - b [設定...] ボタンをクリックし、パスワードを入力して管理タスクを実行します。
  - c [ソフトウェア・ソース] ダイアログボックスで、[他のソフトウェア] タブをクリックして、[Canonical のパートナー] チェックボックスを選択し、Canonical がパートナー向けにパッケージングしているソフトウェアのアーカイブを選択します。
  - d [閉じる] をクリックし、手順に従ってパッケージリストを更新します。
- 2 Ubuntu のメニュー バーで [システム] - [システム管理] - [Synaptic パッケージマネージャ] を選択します。
- 3 [検索] をクリックして、「**vmware**」を検索します。
- 4 表示されるパッケージのリストで、[vmware-view-client] の横にあるチェックボックスを選択して、[インストール指定] を選択します。  
開いているクライアントのチェックボックスは選択しないでください。
- 5 ツールバーで [適用] をクリックします。  
Linux 版 VMware View Client がインストールされます。
- 6 正しくインストールされたことを確認するには、[VMware View] アプリケーションのアイコンが [アプリケーション] - [インターネット] メニューに表示されていることを確認します。

### 次に進む前に

View Client を開始して、正しい仮想デスクトップにログインできることを確認します。[\[初回の View デスクトップへのログイン \(P.11\)\]](#) を参照してください。

## エンドユーザーの証明書確認の構成

たとえば、完全検証を常に実行するように、管理者は証明書検証モードを構成することができます。

証明書確認は、View 接続サーバと View Client 間の SSL 接続に対して実行されます。管理者は検証モードを構成して、以下のいずれかの戦略を使用することができます：

- エンドユーザーは検証モードの選択を許可されています。この一覧の残りでは、3 種類の検証モードについて説明します。
- (検証なし) 証明書の確認は実行されません。
- (警告) 自己署名証明書がサーバによって提出された場合、エンドユーザーは警告を受けます。ユーザーはこの種類の接続を許可するか、しないかを選択できます。



- (フルセキュリティ) 完全な検証を実行し、完全検証に合格しない接続は拒否されます。

各検証確認の詳細については、[\[View Client の証明書チェック モード \(P. 12\)\]](#) を参照してください。

デフォルトの検証モードを設定するには、`view.sslVerificationMode` プロパティを使用します：

- **1** は、**完全検証**を実装します。
- **2** は、**接続が安全ではない可能性がある場合に警告**を実装します。
- **3** は、**検証を実行しない**を実装します。

エンドユーザーが変更できないようにモードを構成するには、クライアントシステムの `/etc/vmware/view-mandatory-config` ファイルの `view.allowSslVerificationMode` プロパティを「**False**」に設定します。[\[View Client のコマンドの使用方法和構成設定 \(P. 18\)\]](#) を参照してください。

## クライアントでの FIPS モードの有効化

クライアントが FIPS (連邦情報処理規格) 140-2 承認済み暗号アルゴリズムとリモート PCoIP 接続を確立するためのプロトコルのみを使うように構成プロパティを設定できます。

この設定はサーバとクライアントの両方に適用されます。一方または両方のエンドポイントを、FIPS モードで動作するように構成できます。FIPS モードで動作するように 1 つのエンドポイントを構成すると、セッション ネゴシエーションに使用できる暗号化アルゴリズムが制限されます。

---

**重要** 1 つのエンドポイントで FIPS モードを有効にしても、他のエンドポイントでは FIPS 140-2 承認の暗号アルゴリズムをサポートしない場合は、接続できません。

---

この設定を無効にするか、構成しない場合は、FIPS モードが使用されます。

### 構成プロパティの設定

FIPS モードを有効にしたり、無効にするには、`pcoip.enable_fips_mode` プロパティを設定できます。プロパティを **1** FIPS モードをオンにする設定、とプロパティを **0** FIPS モードをオフにする設定。たとえば、以下の設定により FIPS モードはオンになります：

```
pcoip.enable_fips_mode = 1
```

等号 (=) の前後にスペースを入れてください。

このプロパティはどのファイル内でも設定できます。View Client の起動時に、設定は、次の順序で各種の場所で処理されます。

- 1 `/etc/teradici/pcoip_admin_defaults.conf`
- 2 `~/pcoip.rc`
- 3 `/etc/teradici/pcoip_admin.conf`

設定が複数の場所で定義されている場合、使用される値は、読み取られた最後のファイルからの値になります。

## PCoIP クライアントサイド イメージ キャッシュの構成

PCoIP クライアントサイド イメージ キャッシングでは、再送信を回避するためにイメージコンテンツをクライアントに保存します。デフォルトにより、この機能を使用すれば帯域幅の使用が抑えられます。

---

**重要** この機能は、View Agent および View 接続サーバが View 5.0 以降のバージョンである場合のみ使用可能です。

---

PCoIP イメージ キャッシュは、一時的なものと同様、空間的冗長性をキャプチャします。たとえば、PDF ドキュメントをスクロールダウンすると、ウィンドウの下部から新しいコンテンツが表示され、一番古いコンテンツはウィンドウのトップから表示されなくなります。他のコンテンツはすべて変わらず、上に移動します。PCoIP イメージ キャッシュは、この空間的で時間的な冗長性を検出できます。

スクロールの間、クライアント デバイスに送られたディスプレイ情報は、主として、かなりの大きさの帯域幅を保存するイメージ キャッシュを使用しているキャッシュ インデックスのシーケンスです。このように効率的なスクロールは、LAN 上、WAN を介する場合のいずれもメリットがあります。

- LAN 上では、帯域幅は比較的制約がありませんが、クライアント サイド イメージ キャッシングを使用しており、かなりの大きさの帯域幅を節約できます。
- WAN を介して、利用可能な帯域幅の制限内に抑えるには、クライアント サイドのキャッシングを使用しなければスクロールのパフォーマンスが低下する場合があります。この場合、クライアント サイドのキャッシングにより帯域幅が節約され、スムーズで高感度のスクロール体験が可能になります。

過去に送信されたディスプレイの一部をクライアントが保存できるように、この機能はデフォルトで有効に設定されています。デフォルトのキャッシュ サイズは 250 MB です。クライアント イメージ キャッシュ サイズは、最低 50 MB から最高 300 MB までのサイズに構成できます。キャッシュ サイズが大きくなればなるほど帯域幅の使用量は減少しますが、クライアント 上ではより多くのメモリが必要となります。キャッシュ サイズが小さくなると、必要な帯域幅が増えます。たとえば、メモリの少ないシンクライアントでは必要となるキャッシュ サイズも少なくなります。

### 構成プロパティの設定

キャッシュ サイズを構成するには、`pcoip.image_cache_size_mb` プロパティを設定します。たとえば、以下の設定ではキャッシュ サイズが 50MB となるように構成されます：

```
pcoip.image_cache_size_mb = 50
```

等号 (=) の前後にスペースを入れてください。50 未満の数を指定すると、50 に変換されます。300 を超える数を設定すると、300 に変換されます。

このプロパティはどのファイル内でも設定できます。View Client の起動時に、設定は、次の順序で各種の場所で処理されます。

- 1 `/etc/teradici/pcoip_admin_defaults.conf`
- 2 `~/pcoip.rc`
- 3 `/etc/teradici/pcoip_admin.conf`

設定が複数の場所で定義されている場合、使用される値は、読み取られた最後のファイルからの値になります。

---

**注意** 以下のプロパティを設定して、イメージ キャッシュが動作中であるということが視覚的にわかるようにできます。

```
pcoip.show_image_cache_hits = 1
```

この構成を使用すれば、イメージ キャッシュからのイメージ内の各タイル (32 x 32 pixel) に対して、タイルの回りに長方形が表示されます。

---

## サーバ接続とデスクトップの管理

View Client を使用して View Connection Server またはセキュリティ サーバに接続し、View デスクトップにログインするか View デスクトップからログオフします。トラブルシューティングする場合にも、割り当てられている View デスクトップをリセットし、チェックアウトしたデスクトップをロールバックできます。

管理者による View デスクトップのポリシーの構成方法によっては、エンド ユーザーはデスクトップで多くの操作を実行できるようになります。

- **初回の View デスクトップへのログイン** (P. 11)  
 エンド ユーザーが仮想デスクトップにアクセスする前に、クライアント システムから仮想デスクトップにログインできることをテストします。
- **View Client の証明書チェック モード** (P. 12)  
 管理者は、またときにはエンド ユーザーは、サーバの証明書チェックが失敗した場合にクライアント接続を拒否するかどうかを設定できます。

- [デスクトップの切り替え \(P. 13\)](#)  
デスクトップに接続している場合に、別のデスクトップに切り替えることができます。
- [デスクトップからのログオフまたは切断 \(P. 13\)](#)  
ログオフせずに View デスクトップから切断すると、アプリケーションは開いたままになります。
- [デスクトップのロールバック \(P. 14\)](#)  
ロールバックは、Windows PC またはノートパソコン上のローカル モードでの使用のためにチェックアウトした仮想デスクトップに行った変更を廃棄することになります。

## 初回の View デスクトップへのログイン

エンドユーザーが仮想デスクトップにアクセスする前に、クライアントシステムから仮想デスクトップにログインできることをテストします。

### 開始する前に

- Active Directory ユーザー名とパスワード、RSA SecurID ユーザー名とパスコード、RADIUS 認証ユーザー名とパスコードなどのログインに必要な認証情報を取得します。
- ログイン用のドメイン名を取得します。
- 管理タスクの実行については以下で説明しています。 [\[View Client 向けの View 接続サーバの準備 \(P. 7\)\]](#) .
- 社内ネットワークの外部から接続し、仮想デスクトップへのアクセスにセキュリティ サーバを使用していない場合、使用しているクライアント デバイスが VPN 接続を使用していることを確認し、この接続をオンにします。

---

**重要** VMware では、VPN よりもセキュリティ サーバの使用を推奨しています。

---

- 仮想デスクトップへのアクセスを提供する サーバの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を用意していることを確認してください。ポート番号が 443 ではない場合は、ポート番号も必要です。
- RDP 表示プロトコルを使用して View デスクトップへの接続を計画している場合は、AllowDirectRDP View Agent グループ ポリシーが有効であることを確認してください。
- 管理者が許可している場合、View server から提示される SSL 証明書について、証明書確認モードを構成できます。 [\[View Client の証明書チェック モード \(P. 12\)\]](#) を参照してください。

### 手順

- 1 ターミナルウィンドウを開いて「**vmware-view**」と入力するか、または Ubuntu メニューバーから [[アプリケーション]] - [[インターネット]] - [[VMware View Client]] を選択します。
- 2 必要に応じてサーバ名とポート番号を入力し、[[続行]] をクリックします。

**view.company.com:1443** は、デフォルト以外のポートを使用した一例です。

- 3 RSA SecurID の認証情報または RADIUS の認証証明書の入力を求められた場合、ユーザー名とパスコードを入力して [[続行]] をクリックします。
- 4 ユーザー名とパスワードを入力し、ドメインを選択した後、[[OK]] をクリックします。

ログイン ダイアログボックスが表示される前に、確認する必要があることを知らせるメッセージが表示される場合があります。

- 5 デスクトップセキュリティ インジケータが赤に変わり、警告メッセージが表示されたら、プロンプトに応答します。  
通常、この警告は View 接続サーバが証明書サムプリントをクライアントに送信しなかったことを示します。サムプリントは証明書公開鍵のハッシュであり、公開鍵を省略したものとして使用されます。View 接続サーバ 4.6.1、5.0.1 以降のバージョンは、サムプリント情報を送信しますが、以前のバージョンではこれを実行しません。

- 6 (オプション) 使用する表示プロトコルおよびウィンドウ サイズを選択します。

オプション	説明
表示プロトコル	デフォルトは、[PCoIP] です。代わりに Microsoft RDP を使用する場合は、デスクトップ名の下にある [[PCoIP]] をクリックして切り替え、[[Microsoft RDP]] を選択します。
ウィンドウ サイズ	デフォルトは、[すべてのモニタ] です。他のウィンドウ サイズを選択するには、[大画面] や [カスタム サイズ] などのデスクトップ名の下にある他のオプションの 1 つをクリックします。

- 7 View デスクトップのショートカットをダブルクリックして、接続します。

接続した後、クライアントウィンドウが表示されます。View Client がデスクトップに接続できない場合は、次の手順を実行します。

- View 接続サーバが SSL を使用しないように構成するかどうかを決定します。View Client は、SSL 接続を必要とします。View Administrator のグローバル設定で、[[クライアント接続に SSL を使用する]] チェックボックスが選択されていないかどうかを確認します。このチェックボックスが選択されていない場合、チェックボックスを選択して SSL を使用する必要があります。または、HTTPS が有効なロード バランサや View 接続サーバへの HTTP 接続を作成するように構成されている他の中間デバイスにクライアントが接続できるように環境をセットアップする必要があります。
- View 接続サーバ用のセキュリティ証明書が正常に動作していることを確認します。正常に動作していない場合は、View Administrator で、デスクトップの View Agent が到達不能になる場合もあります。
- View 接続サーバインスタンスで設定されているタグがこのユーザーからの接続を許可していることを確認します。『VMware View 管理者ガイド』を参照してください。
- ユーザーがこのデスクトップにアクセスする資格を付与されていることを確認します。『VMware View 管理者ガイド』を参照してください。
- RDP 表示プロトコルを使用して View デスクトップに接続している場合、クライアント コンピュータでリモート デスクトップ接続が許可されていることを確認します。

## View Client の証明書チェック モード

管理者は、またときにはエンド ユーザーは、サーバの証明書チェックが失敗した場合にクライアント接続を拒否するかどうかを設定できます。

証明書確認は、View 接続サーバと View Client 間の SSL 接続に対して実行されます。証明書検査では、次のような検査が行われます。

- 証明書の目的は、送信側の ID 検証やサーバ通信の暗号化以外にあるか。つまり、証明書のタイプは正しいか。
- 証明書は期限切れになっているか、また有効なのは未来のみか。つまり、証明書はコンピュータの時刻に応じて有効になっているか。
- 証明書上の共通名は、それを送信するサーバのホスト名と一致しているか。ロード バランサが View Client をあるサーバにリダイレクトする際に、証明書が View Client に入力したホスト名と一致しない場合、不一致が発生する可能性があります。クライアントにホスト名ではなく IP アドレスを入力した場合でも、不一致の原因となる可能性があります。

- 不明なまたは信頼されていない証明機関 (CA) によって署名された証明書か。自己署名された証明書は、信頼されていない CA の証明書タイプの 1 つです。

チェックをパスするには、証明書のトラスト チェーンが、デバイスのローカル証明書ストアでルートになっている必要があります。

---

**注意** ユーザーが Linux クライアントシステムにインストールできる自己署名付ルート証明書を配布する手順については、Ubuntu のドキュメントを参照してください。

View Client は、クライアントシステムの `/etc/ssl/certs` ディレクトリに保存されている PEM 形式の証明書を使用します。この場所に保存されているルート証明書をインポートする手順については、<https://help.ubuntu.com/community/OpenSSL> のドキュメントに記載されている「Importing a Certificate into the System-Wide Certificate Authority Database (システム全体の証明機関データベースへの証明書のインポート)」というタイトルの手順を参照してください。

---

サーバ証明書を提示するほかにも、バージョン 4.6.1 および 5.0.1 以降の View 接続サーバは View Client に証明書のサムプリントも送信します。サムプリントは証明書公開鍵のハッシュであり、公開鍵を省略したものとして使用されます。View server がサムプリントを送信しない場合、接続が信頼されていないことを知らせる警告が表示されます。

管理者が許可している場合、証明書確認モードを設定することができます。VMware View Client メニューバーまたは View デスクトップメニューバーから [[ファイル]] - [[環境設定]] を選択します。選択肢は次の 3 つです。

- [[信頼が確認されていないサーバには絶対に接続しない]]。証明書の確認に失敗した場合、クライアントはサーバに接続できなくなります。失敗したチェックは、エラーメッセージに一覧表示されます。
- [[信頼されていないサーバに接続する前に警告する]]。サーバが自己署名証明書を使用していることが原因で、証明書の確認に失敗した場合、[[続行]] をクリックして警告を無視することができます。自己署名証明書の場合、証明書名は View Client に入力した View 接続サーバ名と一致する必要はありません。
- [[サーバ ID 証明書を検証しない]]。この設定は、証明書チェックは View によって一切実行されないことを意味します。

## デスクトップの切り替え

デスクトップに接続している場合に、別のデスクトップに切り替えることができます。

### 手順

- ◆ 同じサーバ上、または異なるサーバから View デスクトップを選択します。

オプション	操作
同じサーバの異なる View デスクトップを選択する	[[デスクトップ]] - [[切断]] をメニューバーで選択します。
異なるサーバの View デスクトップを選択する	メニューバーから [[ファイル]] - [[別のサーバを選択]] を選択します。

## デスクトップからのログオフまたは切断

ログオフせずに View デスクトップから切断すると、アプリケーションは開いたままになります。

View デスクトップに接続していないときに、最初に接続しなくてもログオフできます。この機能を使用すると、デスクトップに <Ctrl> + <Alt> + <Del> を送信してから [[ログオフ]] をクリックすると同じ結果になります。

---

**注意** Windows のキーの組み合わせ <Ctrl> + <Alt> + <Del> は、View デスクトップではサポートしていません。<Ctrl> + <Alt> + <Del> の代わりに、メニューバーから [デスクトップ] - [Ctrl+Alt+Del の送信] を選択することもできます。

あるいは、<Ctrl> + <Alt> + <Insert> を押します。

---

**手順**

- ログオフせずに切断する。

オプション	操作
<b>View Client も終了する</b>	ウィンドウの隅にある [[閉じる]] ボタンをクリックするか、メニュー バーの [[ファイル]] - [[終了]] を選択します。
<b>同じサーバの異なる View デスクトップを選択する</b>	[[デスクトップ]] - [[切断]] をメニュー バーで選択します。
<b>異なるサーバの View デスクトップを選択する</b>	メニュー バーから [[ファイル]] - [[別のサーバを選択]] を選択します。

**注意** View 管理者は、切断された時点で自動的にログオフするようにデスクトップを設定できます。その場合、デスクトップで開いているプログラムは停止します。

- ログオフして切断する。

オプション	操作
<b>デスクトップのオペレーティングシステムでメニュー バーから</b>	Windows の [スタート] メニューを使用してログオフします。 [[デスクトップ]] - [[切断してログオフ]] を選択します。 この手順を使用すると、初めに、View デスクトップで開いているファイルが保存されずに閉じられます。

- View デスクトップに接続していない場合にログオフする。
  - a デスクトップショートカットがあるホーム画面から、デスクトップを選択し、メニュー バーから [[デスクトップ]] - [[ログオフ]] を選択します。
  - b 入力を要求されたら、View デスクトップにアクセスするための認証情報を入力します。  
この手順を使用すると、初めに、View デスクトップで開いているファイルが保存されずに閉じられます。

**デスクトップのロールバック**

ロールバックは、Windows PC またはノートパソコン上のローカル モードでの使用のためにチェックアウトした仮想デスクトップに行った変更を廃棄することになります。

View administrator がこの機能を利用でき、デスクトップがチェックアウトされている場合のみ、View デスクトップをロールバックできます。



**注意** ローカル モードのデスクトップが変更され、ロールバック前に変更が View サーバにレプリケートされない場合は、変更は失われます。

**開始する前に**

- Active Directory ユーザー名とパスワード、RSA SecurID ユーザー名とパスコード、RADIUS 認証ユーザー名とパスコードなどのログインに必要な認証情報を取得します。
- データまたはファイルを保存するために、デスクトップをサーバにバックアップします。

View Administrator を使ってデータをサーバにレプリケートするか、ポリシーが許可する設定の場合、デスクトップが現在チェックアウトされている Windows クライアントのローカル モードで View Client を使用できます。

**手順**

- 1 View Client のホーム画面に [ [View 接続サーバ] ] プロンプトが表示されている場合、サーバ名を入力して、[ [続行] ] をクリックします。
  - a RSA SecurID の認証情報または RADIUS の認証証明書を入力を求められた場合、ユーザー名とパスコードを入力して [ [続行] ] をクリックします。
  - b ログイン ダイアログ ボックスでユーザー名とパスワードを入力します。
- 2 View デスクトップのショートカットを表示している View Client のホーム画面で、デスクトップを選択して、メニューバーから [デスクトップ] - [デスクトップのロールバック] を選択します。

View デスクトップがロールバックされた後、Linux クライアントからログインできます。

## Linux システムでの Microsoft Windows デスクトップの使用

Linux 版 View Client では、Windows 版 View Client に搭載されている機能の一部がサポートされています。

### 機能サポート一覧

Linux 版 View Client では、Windows 版 View Client のデスクトップやノート PC など、その他のクライアントで使用可能な機能の一部がサポートされています。

表 1-1. Linux クライアント用 Windows デスクトップでサポートされる機能

機能	Windows 7 の View デスクトップ	Windows Vista の View デスクトップ	Windows XP の View デスクトップ
RSA SecurID または RADIUS	○	○	○
シングル サインオン	○	○	○
RDP 表示プロトコル	○	○	○
PCoIP 表示プロトコル	○	○	○
USB アクセス			
Wyse MMR			
仮想印刷			
ロケーション ベースの印刷	○	○	○
スマート カード			
複数のモニタ	○	○	○
ローカル モード			

上記の機能の詳細および制限事項については、『VMware View アーキテクチャ プランニング ガイド』を参照してください。

**注意** この機能サポート一覧は、VMware が Ubuntu 用に提供している Linux 版 View Client も対象としています。また、VMware のパートナー数社が、VMware View の展開用のシンクライアント デバイスを提供しています。各シンクライアント デバイスで使用可能な機能は、ベンダおよびモデルと、企業が採用する構成によって決定されます。シンクライアント デバイスのベンダーおよびモデルの詳細については、VMware Web サイトから入手可能な『[VMware 互換性ガイド](#)』（英語版）を参照してください。

## 国際化

View Client のユーザー インターフェイスとドキュメントは、英語、日本語、フランス語、ドイツ語、簡体中国語、および韓国語で利用可能です。

Ubuntu 10.4 Linux クライアントシステムを使用しており、英語以外の言語で View Client ユーザー インターフェイスを表示したい場合、UTF-8 エンコーディングを使用するロケールを使用できるようにクライアントシステムを設定する必要があります。

## キーボードとモニタ

View デスクトップでは、複数のモニタとすべてのタイプのキーボードを使用できます。特定の設定を実行すると、最高のユーザー エクスペリエンスを実現できます。

### 複数のモニタを使用する場合のベストプラクティス

以下は、View デスクトップで複数のモニタを正しく使うための推奨事項です。

- PCoIP を使用すれば、十分なビデオ RAM がある場合、最大 4 つまでのモニタを使用できます。

Ubuntu クライアントシステムで 3 つ以上のモニタを使って View デスクトップを表示するには、`kernel.xhmmx` 設定を適切に構成する必要があります。次の公式を使用します：

<最高水平解像度> X <最高垂直解像度> X <モニタの最大数> X 4

たとえば、`kernel.shmmax` を 65536000 に手動で設定すれば、2560x1600 の画面解像度で 4 つのモニタを使用できるようになります。

- RDP では、ディスプレイはスパン モードでのみ表示可能です。スパン モードを使用してディスプレイを複数のモニタに適切に拡張するには、モニタは同じ高さである必要があります。

### 画面解像度

画面解像度を設定する際は、以下のガイドラインを考慮に入れます：

- セカンダリ モニタ上で View デスクトップを開き、そのモニタ上で画面解像度を変更すると、View デスクトップはプライマリ モニタに移動します。
- PCoIP では、複数のモニタがある場合、各モニタの解像度を個別に調整できます。ディスプレイごとの解像度は最高 2560x1600 です。
- RDP では、複数のモニタがある場合、各モニタの解像度は個別に調整できません。モニタの高さがすべて同じ場合、ディスプレイは全モニタに拡張されます。

### キーボードの制限

ほとんどの場合、View デスクトップと物理コンピュータのいずれを使用しても、キーボードの動作は同じです。以下は、発生する可能性のある制限のリストです。ただし、周辺機器のタイプおよびクライアントシステム上のソフトウェアにより異なります：

- マルチメディア キーボードのマルチメディア キーの一部が動作しない場合があります。たとえば、[Music] キーと [My Computer] キー は動作しない可能性があります。
- RDP を使用してデスクトップに接続し、Fluxbox ウィンドウ マネージャを使用している場合、View デスクトップでスクリーン セーバーが動作中であれば、一定のアイドル後、キーボードが動作を停止する可能性があります。

使用するウィンドウ マネージャに関係なく、VMware は View デスクトップではスクリーン セーバーをオフにして、スリープタイマーを指定しないことをお勧めします。



## テキストのコピー アンド ペースト

クライアントシステムとリモート View デスクトップの間でテキストをコピー アンド ペーストできます。管理者がこの機能を有効にしていると、View デスクトップとクライアントシステムの間、または 2 つの View デスクトップの間でテキストをコピー アンド ペーストできます。制限事項がいくつか存在します。

PCoIP 表示プロトコルを使用し、View 5.x 以降の View デスクトップを使用している場合、View の管理者は、クライアントシステムから View デスクトップへ、または View デスクトップからクライアントシステムへのコピー アンド ペースト操作のみを許可するように設定できます。また、双方向のコピー アンド ペースト操作を許可したり、これらの操作を禁止したりすることもできます。

管理者は、View Agent を View デスクトップに関連付けるグループ ポリシー オブジェクト (GPO) を使用して、コピー アンド ペーストの機能を構成できます。詳細については、『VMware View の管理』マニュアルのポリシーの構成の章にある View PCoIP の一般的なセッション変数に関するトピックを参照してください。

プレーン テキストまたは書式付きテキストを、View Client と View デスクトップ間でコピーできますが、ペーストされたテキストはプレーン テキストになります。

グラフィックは、コピー アンド ペーストできません。また、View デスクトップとクライアントコンピュータのファイルシステムの間では、ファイルのコピー アンド ペーストはできません。

## View Client のトラブルシューティング

View Client に関するほとんどの問題は、デスクトップのリセットまたは VMware View Client の再インストールで解決することができます。

### デスクトップのリセット

リセット操作を実行すると、デスクトップがシャットダウンおよび再起動されます。保存されていないデータは失われます。デスクトップオペレーティングシステムが応答しなくなった場合、デスクトップのリセットが必要となる場合があります。

View デスクトップをリセットする操作は、物理的な PC を強制的に再起動するためにその PC のリセット ボタンを押す操作に相当します。View デスクトップで開いているすべてのファイルが、保存されずに閉じられることになります。

デスクトップをリセットできるのは、View 管理者がこの機能を有効にしている場合のみです。

#### 手順

- ◆ [デスクトップのリセット] コマンドを使用します。

オプション	操作
デスクトップのオペレーティングシステムで	メニューバーから [デスクトップ] - [デスクトップのリセット] を選択します。
デスクトップショートカットがあるホーム画面から	デスクトップを選択し、メニューバーから [デスクトップ] - [デスクトップのリセット] を選択します。

View デスクトップのオペレーティングシステムが再起動されます。View Client がデスクトップから切断されます。

#### 次に進む前に

システムが再起動するのを待ってから、View デスクトップへの接続を試行します。

### View Client のアンインストール

View Client の問題を VMware View Client アプリケーションをアンインストールし、再インストールして解決できることがあります。

他のアプリケーションをアンインストールするのと同じ方法で、View Client をアンインストールします。

たとえば、[アプリケーション] - [Ubuntu Software Center] を選択し、[インストールされているソフトウェア] セクションで [vmware-view-client] を選択し、[削除] をクリックします。

アンインストールが完了すると、アプリケーションを再インストールできます。

[Linux 版 View Client のインストール (P. 8)] を参照してください。

## View Client のコマンドの使用法と構成設定

コマンドラインのオプションまたはそのオプションに相当する構成ファイルのプロパティを使用して、View Client を構成できます。

`vmware-view` コマンドライン インターフェイスを使用するか、構成ファイルのプロパティを設定して、View Client でユーザーに表示するデフォルト値を定義したり、ユーザーに情報の確認を求めるいくつかのダイアログ ボックスを表示しないようにできます。また、ユーザーに変更させない設定を指定することもできます。

### 構成設定の処理順序

View Client が起動するときに、構成設定は、次の順序で各種の場所で処理されます。

- 1 `/etc/vmware/view-default-config`
- 2 `~/.vmware/view-preferences`
- 3 コマンドライン引数
- 4 `/etc/vmware/view-mandatory-config`

設定が複数の場所で定義されている場合、使用される値は、読み取られた最後のファイルまたはコマンドライン オプションの値になります。たとえば、ユーザー設定より優先される設定を指定するには、`/etc/vmware/view-mandatory-config` ファイルでプロパティを設定します。

ユーザーが変更できるデフォルト値を設定するには、`/etc/vmware/view-default-config` ファイルを使用します。ユーザーが設定を変更した後、View Client を終了すると、変更された設定は `~/.vmware/view-preferences` ファイルに保存されます。

### ユーザーがデフォルト値を変更できないようにするプロパティ

各プロパティについて、ユーザーにこの設定の変更を許可するかどうかを制御する `view.allow` プロパティを設定できます。たとえば、`/etc/vmware/view-mandatory-config` ファイルで `view.allowDefaultBroker` プロパティを "FALSE" に設定すると、ユーザーは View Client を使用するとき [サーバ名] フィールドで名前を変更できなくなります。

### コマンドライン インターフェイス使用時の構文

ターミナル ウィンドウで、次の形式の `vmware-view` コマンドを使用します。

```
vmware-view [<command-line-option> [<argument>]] ...
```

デフォルトでは、`vmware-view` コマンドは、`/usr/bin` ディレクトリにあります。

すべてのオプションに短縮形があるわけではありませんが、オプション名の短縮形または長形式のいずれかを使用できます。たとえば、ドメインを指定する場合、`-d` (短縮形) または `--domainName=` (長形式) のいずれかを使用できます。長形式を使用することを選択すると、ユーザーにとってスクリプトが読みやすくなる場合があります。

`--help` オプションを使用して、コマンドライン オプションのリストと使用方法の情報を取得できます。

**重要** プロキシを使用する必要がある場合は、以下の構文を使用します：

```
http_proxy=<proxy_server_URL:port> https_proxy=<proxy_server_URL:port> vmware-view
<options>
```

以前、このプロキシ用に設定された環境変数をクリアする必要があるため、この回避策は必要です。このアクションを実行しない場合、プロキシ例外設定が View Client 内で有効になりません。View 接続サーバインスタンス用のプロキシ例外を構成します。

## View Client の構成設定

便宜性を図るために、ほぼすべての構成設定に、`<key>=<value>` プロパティとそれに相当するコマンドライン オプション名の両方が存在します。いくつかの設定については、コマンドライン オプションは存在し、構成ファイルで設定できる相当するプロパティは存在しない場合があります。その他のいくつかの設定については、コマンドライン オプションが利用できない場合があり、プロパティを設定する必要があります。

**重要** USB リダイレクトや MMR 用などのコマンドライン オプションと構成キーの一部は、サードパーティのベンダーより提供される View Client のバージョンでのみで利用可能です。これらのパートナーの詳細については [【VMware 互換性ガイド】](#) を参照してください。

表 1-2. View Client のコマンドライン オプションと構成ファイル キー

構成キー	コマンドライン オプション	説明
<code>view.allowDefaultBroker</code>	<code>-l, --lockServer</code> 例： <code>--lockServer -s view.company.com</code>	このコマンドライン オプションを使用するか、プロパティを "FALSE" に設定すると、クライアントがこれまでどのサーバにも接続したことがなく、コマンドラインや設定ファイルでサーバアドレスが指定されていない場合を除いて、[サーバ名] フィールドが無効になります。
<code>view.autoConnectBroker</code>	なし	<b>view.defaultBroker</b> 構成プロパティが設定されていない、または <code>--serverURL=</code> コマンドライン オプションが使用されていない限り、最後に使用された View server に自動的に接続します。 <b>"TRUE"</b> または <b>"FALSE"</b> を指定します。デフォルトは "FALSE" です。 このプロパティと <b>view.autoConnectDesktop</b> プロパティを "TRUE" に設定することは、 <b>view.nonInteractive</b> プロパティを "TRUE" に設定することと同じです。
<code>view.autoConnectDesktop</code>	なし	<b>view.defaultDesktop</b> 構成プロパティが設定されていない、または <code>--desktopName=</code> コマンドライン オプションが使用されていない限り、最後に使用された View デスクトップに自動的に接続します。 <b>"TRUE"</b> または <b>"FALSE"</b> を指定します。デフォルトは "FALSE" です。 このプロパティと <b>view.autoConnectBroker</b> プロパティを "TRUE" に設定することは、 <b>view.nonInteractive</b> プロパティを "TRUE" に設定することと同じです。

表 1-2. View Client のコマンドライン オプションと構成ファイル キー (続き)

構成キー	コマンドライン オプション	説明
view.defaultBroker	-s, --serverURL= 例: -- serverURL=https://view.company.com -s view.company.com --serverURL=view.company.com:1443	View Client の [サーバ名] フィールドに指定する名前を追加します。完全修飾のドメイン名を指定します。デフォルトのポート番号 443 を使用しない場合には、ポート番号も指定できます。デフォルトは、直近で使用された値になります。
view.defaultDesktop	-n, --desktopName=	<b>autoConnectDesktop</b> が "TRUE" に設定され、ユーザーが複数のデスクトップにアクセス可能である場合に、どのデスクトップを使用するかを指定します。  これは、[デスクトップの選択] ダイアログ ボックスに表示される名前です。この名前は、通常はプール名です。
view.defaultDesktopHeight	なし	View デスクトップのウィンドウのデフォルトの高さをピクセルで指定します。
view.defaultDesktopSize	--desktopSize= 例: --desktopSize="1280x800" --desktopSize="all"	View デスクトップのウィンドウのデフォルトのサイズを設定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ すべてのモニタを使用するには、このプロパティを "1" に設定するか、コマンドライン引数 "all" を使用します。</li> <li>■ 1 つのモニタでフルスクリーン モードを使用するには、このプロパティを "2" に設定するか、コマンドライン引数 "full" を使用します。</li> <li>■ 大きなウィンドウを使用するには、このプロパティを "3" に設定するか、コマンドライン引数 "large" を使用します。</li> <li>■ 小さなウィンドウを使用するには、このプロパティを "4" に設定するか、コマンドライン引数 "small" を使用します。</li> <li>■ カスタム サイズを設定するには、このプロパティを "5" に設定してから、<b>view.defaultDesktopWidth</b> および <b>view.defaultDesktopHeight</b> プロパティも設定します。あるいは、コマンドラインで "&lt;width&gt;x&lt;height&gt;" として、幅と高さをピクセル数で指定します。</li> </ul>
view.defaultDesktopWidth	なし	View デスクトップのウィンドウのデフォルトの幅をピクセルで指定します。
view.defaultDomain	-d, --domainName=	すべての接続について View Client が使用するドメイン名を設定し、View Client の認証ダイアログ ボックスの [ドメイン名] フィールドにこのドメイン名を追加します。
view.defaultPassword	-p "-", --password="-"	常に "-" を指定し、 <b>stdin</b> からパスワードを読み取ります。  View Client がすべての接続について使用するパスワードを設定し、View 接続サーバがパスワード認証に対応している場合、View Client の認証ダイアログ ボックスの [パスワード] フィールドにこのパスワードを追加します。  <b>注意</b> パスワードを空白にすることはできません。これは、--password="" と指定できないということです。

表 1-2. View Client のコマンドライン オプションと構成ファイル キー (続き)

構成キー	コマンドライン オプション	説明
<code>view.defaultProtocol</code>	<code>--protocol=</code>	使用する表示プロトコルを指定します。 <b>"PCOIP"</b> または <b>"RDP"</b> を指定します。この値は、大文字と小文字の区別があります。たとえば、 <b>rdp</b> と入力すると、使用されたプロトコルがデフォルトとなります。デフォルトは、プールの設定の下の View Administrator で指定された設定です。
<code>view.defaultUser</code>	<code>-u, --userName=</code>	すべての接続について View Client が使用するユーザー名を設定し、View Client の認証ダイアログボックスの [ユーザー名] フィールドに指定するユーザー名を追加します。 キオスク モードでは、アカウント名をクライアントの MAC アドレスを基準にすることができます。また、 <b>custom-</b> のような認識されているプリフィックス文字列から開始することもできます。
<code>view.fullScreen</code>	<code>--fullScreen</code>	ホスト OS を非表示にして、View Client ユーザー インターフェイスをフル スクリーン モードで開きます。このオプションは、デスクトップセッションのスクリーン モードには影響しません。 構成キーを設定している場合には、 <b>"TRUE"</b> または <b>"FALSE"</b> を指定します。デフォルトは <b>"FALSE"</b> です。
<code>view.kbdLayout</code>	<code>-k, --kbdLayout=</code> 例： <code>--kbdLayout="en-us"</code> <code>-k "fr"</code>	キーボード レイアウトで使用する言語を言語コードで指定します。
<code>view.kioskLogin</code>	<code>--kioskLogin</code> 例：[例: キオスク モードの例 (P. 23)] を参照してください。	View クライアントがキオスク モード アカウントを使用して認証することを指定します。 構成キーを設定している場合には、 <b>"TRUE"</b> または <b>"FALSE"</b> を指定します。デフォルトは <b>"FALSE"</b> です。
<code>view.mmrPath</code>	<code>-m, --mmrPath=</code> 例： <code>--mmrPath="/usr/lib/altmmr"</code>	(サードパーティのベンダーからの配布でのみ入手可能) パスを Wyse MMR (マルチメディア リダイレクト) ライブラリがあるディレクトリに指定します。
<code>view.nomenuBar</code>	<code>--noMenuBar</code>	View Client がフルスクリーン モードになっている場合に View Client メニューバーを表示せず、ユーザーが View デスクトップからログオフ、リセット、切断するためのメニュー オプションにアクセスできないようにします。キオスク モードを構成するときには、このオプションを使用します。 構成キーを設定している場合には、 <b>"TRUE"</b> または <b>"FALSE"</b> を指定します。デフォルトは <b>"FALSE"</b> です。

表 1-2. View Client のコマンドライン オプションと構成ファイル キー (続き)

構成キー	コマンドライン オプション	説明
<code>view.nonInteractive</code>	<pre>-q, --nonInteractive 例: --nonInteractive -- serverURL="https://view.company.com" --userName="user1" --password="-" --domainName="xyz" --desktopName="Windows 7"</pre>	<p>コマンドラインや構成プロパティで指定された画面をスキップして、エンドユーザーに不要な UI 手順を表示しないようにします。</p> <p>構成キーを設定している場合には、<b>"TRUE"</b> または <b>"FALSE"</b> を指定します。デフォルトは <b>"FALSE"</b> です。</p> <p>このプロパティを <b>"TRUE"</b> に設定することは <b>view.autoConnectBroker</b> と <b>view.autoConnectDesktop</b> プロパティを <b>"TRUE"</b> に設定することと同じです。</p>
<code>view.once</code>	<pre>--once</pre>	<p>エラーが発生した場合に View Client が接続を再試行しないことを指定します。</p> <p>View 4.6 クライアントに対する類似のワークフローの入手を希望する場合、<b>--once</b> を使用します。このオプションにより、ユーザーがデスクトップからの接続を切断またはログオフした後、View クライアントが強制終了となります。</p> <p>キオスクモードを使用している場合、通常はこのオプションを指定し、終了コードを使用してエラーを処理することをお勧めします。指定しない場合、<b>vmware-view</b> プロセスをリモートから強制終了することが難しい場合があります。</p> <p>構成キーを設定している場合には、<b>"TRUE"</b> または <b>"FALSE"</b> を指定します。デフォルトは <b>"FALSE"</b> です。</p>
<code>view.rdesktopOptions</code>	<pre>--rdesktopOptions= 例: --rdesktopOptions="-f -m"</pre>	<p>(Microsoft RDP 表示プロトコルを使用している場合に利用可能) <code>rdesktop</code> アプリケーションに転送するコマンドライン オプションを指定します。<code>rdesktop</code> オプションの詳細については、<code>rdesktop</code> のドキュメントを参照してください。</p>
なし	<pre>-r, --redirect= 例: --redirect="sound:off"</pre>	<p>(Microsoft RDP 表示プロトコルを使用している場合に利用可能) <code>rdesktop</code> が View デスクトップにリダイレクトするローカル デバイスを指定します。</p> <p><code>rdesktop</code> の <b>-r</b> オプションに渡すデバイス情報を指定します。1 つのコマンドで複数のデバイス オプションを設定できます。</p>
<code>view.sslVerificationMode</code>	なし	<p>サーバ証明書検証モードを設定します。</p> <p>証明書の検証確認のいずれかが失敗した場合に接続を拒否するには、<b>"1"</b> を、警告するものの自己署名の証明書を使用する接続を許可する場合には <b>"2"</b> を、また、検証できない接続を許可する場合には <b>"3"</b> を指定します。<b>"3"</b> を指定すると、検証確認は実行されません。デフォルトは <b>[2]</b> です。</p>
なし	<pre>--printEnvironmentInfo 例: --printEnvironmentInfo -s view.company.com</pre>	<p>IP アドレス、MAC アドレス、マシン名、およびドメイン名などクライアント デバイスの環境に関する情報を表示します。</p> <p>キオスクモードでは、MAC アドレスを基準としてクライアントのアカウントを作成できます。MAC アドレスを表示するには、<b>-s</b> オプションと一緒にこのオプションを使用する必要があります。</p>

表 1-2. View Client のコマンドライン オプションと構成ファイル キー (続き)

構成キー	コマンドライン オプション	説明
なし	<code>--usb=</code>	(サードパーティのベンダーからの配布でのみ入手可能) USB リダイレクトに使用するオプションを指定します。 <a href="#">「USB デバイスのリモートデスクトップへのリダイレクト (P. 25)」</a> を参照してください。
なし	<code>--version</code>	View Client に関するバージョン情報を表示します。

## 例: キオスク モードの例

キオスク ユーザーには、航空会社のチェックイン ステーションにいる顧客、教室または図書館にいる学生、医療データ入力ワークステーションにいる医療スタッフ、セルフサービス地点にいる顧客などが含まれます。ユーザーはクライアント デバイスまたは View デスクトップを使用するためにログインする必要がないため、アカウントはユーザーではなく、クライアント デバイスに関連付けられます。ただし引き続き、ユーザーに、一部のアプリケーションでは認証情報を入力するよう求めることもできます。

キオスク モードを設定するには、View 接続サーバインスタンスの `vdmadmin` コマンドライン インターフェイスを使用し、『VMware View 管理者ガイド』のキオスク モードに関する章に記載されているいくつかの手順を実行する必要があります。キオスク モードを設定した後は、Linux クライアントで `vmware-view` コマンドを使用して、キオスク モードで View デスクトップに接続できます。

キオスク モードで Linux クライアントから View デスクトップに接続するには、少なくとも、次の構成キーまたはコマンドライン オプションを追加する必要があります。

構成キー	同等のコマンドライン オプション
<code>view.kioskLogin</code>	<code>--kioskLogin</code>
<code>view.nonInteractive</code>	<code>-q, --nonInteractive</code>
<code>view.fullScreen</code>	<code>--fullscreen</code>
<code>view.nomenuBar</code>	<code>--nomenuBar</code>
<code>view.defaultBroker</code>	<code>-s, --serverURL=</code>

これらの構成設定の省略は、キオスク モードではサポートされません。View 接続サーバがデフォルトではないキオスク ユーザー名を求めよう設定されている場合、`view.defaultUser` プロパティも設定するか、`-u` または `--userName=` コマンドライン オプションを使用する必要があります。デフォルト以外のユーザー名が求められず、ユーザー名を指定しない場合は、View Client は、デフォルトのキオスク ユーザー名を取得して使用できます。

**注意** `view.sslVerificationMode` 構成キーを設定する場合、このキーは必ず `/etc/vmware/view-mandatory-config` ファイルで設定してください。キオスク モードでクライアントを実行する場合、クライアントは `view-preferences` ファイルを確認しません。

この例に表示されているコマンドは、Linux クライアント システムで View Client を実行します。また、次の特徴があります。

- ユーザーアカウント名は、クライアントの MAC アドレスを基準とします。
- View Client は、View Client のメニュー バーが表示されないフル スクリーン モードで実行されます。
- ユーザーは、指定された View 接続サーバインスタンスおよび View デスクトップに自動的に接続され、ログイン認証の入力は求められません。

- 接続エラーが発生する場合、戻されるエラーコードによって、スクリプトが実行されるか、キオスク監視プログラムによってエラーが処理される場合があります。たとえば、その結果、クライアントシステムで誤った順序で画面が表示される場合や、View 接続サーバへの再接続が試行されるまである程度の時間を待機する場合があります。

```
./vmware-view --kioskLogin --nonInteractive --once --fullscreen --nomenubar
--serverURL="server.mycomany.com" --userName="CM-00:11:22:33:44:55:66:77" --
password="mypassword"
```

## View Client の終了コード

View Client のコマンドライン インターフェースは、View Client で発生したエラーの性質を示す終了コードを返すことがあります。

表 1-3 に、`vmware-view` コマンドが返す可能性がある終了コードを示します。Windows 版 View Client だけに関連するコードもあります。

表 1-3. View Client の終了コード

終了コード	説明
-1	キオスク モードでの致命的エラーです。
0	成功しました。
1	接続に失敗しました。
2	ログインに失敗しました。
3	デスクトップを起動できませんでした。
4	RDP を起動できませんでした。
5	RDP 操作に失敗しました。
6	トンネル接続が失われました。
7	ローカル デスクトップの転送に失敗しました。
8	ローカル デスクトップのチェックインに失敗しました。
9	ローカル デスクトップのチェックアウトに失敗しました。
10	ローカル デスクトップのロールバックに失敗しました。
11	認証中に不明な結果を受信しました。
12	認証エラーです。
13	不明な認証方式の使用要求を受信しました。
14	無効なサーバ応答です。
15	デスクトップが切断されました。
16	トンネルが切断されました。
17	将来の開発のために予約済みです。
18	将来の開発のために予約済みです。
19	サポートされていないキオスク操作です。
20	リモート マウス、キーボード、または画面 (RMKS) 接続エラーです。
21	PIN エラーです。
22	PIN が一致しません。
23	パスワードが一致しません。
24	View Connection Server エラーです。
25	デスクトップを使用できませんでした。



## USB デバイスのリモート デスクトップへのリダイレクト

`vmware-view` コマンドの `--usb=` コマンドライン オプションを使用して、View デスクトップにリダイレクトできる USB デバイスを構成します。USB コンポーネントは、サードパーティのベンダーより提供される Linux 版 View Client のバージョンがある場合のみ使用可能です。

`--usb=` オプションに対する引数が USB リダイレクト コマンド `vmware-view-usb` に送られます。

以下の例では、トレースレベルのログ処理をオンにしています：

```
vmware-view --usb=log:trace
```

設定する各 `vmware-view-usb` オプション用の `--usb` オプションの複数のインスタンスを指定できます。以下の例では、デバッグレベルのログ処理をオンにして 以下により指定されたデバイスを除外します ID：

```
vmware-view --usb=log:debug
--usb=exid:vid0012pid0034
```

以下の表には、`--usb` オプションで使用可能な引数が一覧表示されています。

表 1-4. USB リダイレクト オプション

オプション	説明
<code>disable-boot-fwd</code>	View USB クライアントによるブート デバイスの検出とフィルタリングを無効にします。このオプションを指定すると、クライアント システムのブート元を含む全 USB デバイスが転送されることとなります。
<code>ex:&lt;device1&gt;[,&lt;device2&gt;]...</code>	転送されるものから指定したデバイスのリストを除外します。例： <code>vmware-view --usb=ex:"flash 1"</code>
<code>exfa:&lt;device-family1&gt;[,&lt;device-family2&gt;]...</code>	転送されるものから指定したデバイス ファミリのリストを除外します。例： <code>vmware-view --usb=exfa:storage</code>
<code>exid:&lt;device-ID1&gt;[,&lt;device-ID2&gt;]...</code>	転送されるものから指定したデバイスのリストを除外します、この場合デバイスはベンダーの 16 進数の値とフォーマット <code>vid&lt;xxxx&gt;pid&lt;xxxx&gt;</code> を使用している製品 ID により指定されます。例： <code>vmware-view --usb=exid:vid1e2fpid5a1e</code>
<code>expt:&lt;device-path1&gt;[,&lt;device-path2&gt;]...</code>	転送されるものからデバイスのリストを除外します、この場合デバイスはバスの 10 進法の値とフォーマット <code>bus&lt;n&gt;port&lt;n&gt;</code> を使用しているポートの値により指定されます。例： <code>vmware-view --usb=expt:bus1port4,bus5port3</code>
<code>in:&lt;device1&gt;[,&lt;device2&gt;]...</code>	転送される指定のデバイスのリストを含めます。例： <code>vmware-view --usb=in:"flash 1"</code>
<code>infa:&lt;device-family1&gt;[,&lt;device-family2&gt;]...</code>	転送される指定のデバイス ファミリのリストを含めます。例： <code>vmware-view --usb=infa:storage</code>
<code>inid:&lt;device-ID1&gt;[,&lt;device-ID2&gt;]...</code>	転送されるデバイスのリストを含めます、この場合デバイスはベンダーの 16 進法の値とフォーマット <code>vid&lt;xxxx&gt;pid&lt;xxxx&gt;</code> を使用している製品 ID により指定されます。例： <code>vmware-view --usb=inid:vid27f8pid2a1b</code>

表 1-4. USB リダイレクト オプション (続き)

オプション	説明
<code>inpt:&lt;device-path1&gt;[,&lt;device-path2&gt;]...</code>	転送されるデバイスのリストを含めます、この場合デバイスは バスの 10 進法の値とフォーマット <code>bus&lt;n&gt;port&lt;n&gt;</code> を使用しているポートの値により指定されます。例: <code>vmware-view</code> <code>--usb=inpt:bus3port1,bus4port2</code>
<code>log:{debug error info trace}</code>	以下のログ処理レベルを指定します。 <code>vmware-view-usb:trace</code> 、 <code>debug</code> 、 <code>info</code> (デフォルト)、または <code>error</code> (詳細が少ない順に)。ログ ファイル ( <code>backendLog.txt</code> ) は、 <code>/tmp/vmware-&lt;username&gt;/vmware-view-usb-&lt;pid&gt;.log</code> に書き込まれます。例: <code>vmware-view</code> <code>--usb=log:error</code>

デバイスを含めるまたは除外する優先順位は以下のように、すなわち高から低になります。

- 1 **expt** (バスとポートにより指定されるデバイスを除外します)
- 2 **inpt** (バスとポートにより指定されるデバイスを含めます)
- 3 **ex** (指定したデバイスのリストを除外します)
- 4 **in** (指定したデバイスのリストを含めます)
- 5 **exid** (ベンダーと製品 ID により指定されるデバイスを除外します)
- 6 **inid** (ベンダーと製品 ID により指定されるデバイスを含めます)
- 7 **exfa** (指定したデバイス ファミリのリストを除外します)
- 8 **infa** (指定したデバイス ファミリのリストを含めます)

以下の例では、その ID により指定される 1 つのデバイスから離れたすべてのストレージ ファミリ デバイスを除外しています :

```
vmware-view --usb=exfa:storage
--usb=inid:vid1812pid1492
```

以下は **infa** および **exfa** オプションで使用できる USB デバイス ファミリ クラスのリストです。

audio	printer
bluetooth	security
comm	smart-card
hid	storage
hid-bootable	unknown
hub	vendor
imaging	video
other	wireless
pda	wusb
physical	

# インデックス

## C

Canonical 8  
Ctrl+Alt+Delete 13  
Ctrl+Alt+Del メニューコマンド/ソウシン 13

## F

FIPS モード 9

## L

Linux、View Client のインストール 6

## P

PCoIP クライアント イメージ キャッシュ 9

## S

SSL 証明書、検証する 8

## U

Ubuntu 8  
UPN、View Client 11  
USB デバイスの転送 25  
USB リダイレクト 25

## V

View Agent、インストール要件 7  
View Client for Linux、インストール 8  
View Client のアンインストール 17  
View Client  
    Linux 版のシステム要件 6  
    Linux クライアント/セットアップ 6  
    起動 11  
    デスクトップから切断 13  
    トラブルシューティング 17  
View 接続サーバ 7  
View デスクトップ、ロールバック 14  
View デスクトップのロールバック 14  
View デスクトップへログイン 11  
vmware-view コマンドライン インターフェイス 18

## W

Windows デスクトップ 15  
wswc コマンド、終了コード 24

## い

イメージ キャッシュ、クライアント 9  
インストール手順 8

## お

オペレーティング システム、View Agent でサポートされている 7

## か

画面解像度 16

## き

キーボード 16  
機能サポート マトリックス、Linux 版 15  
キャッシング、クライアントサイド イメージ 9

## く

クライアントイメージ キャッシュ 9  
クライアント デバイスの前提条件 7

## こ

構成プロパティ 18  
国際化 16  
コマンドライン インターフェイス 18

## さ

サーバ証明書検証 8  
サーバ接続 10

## し

システム要件、Linux 版 6  
証明書、問題の無視 8, 12  
証明書確認の検証モード 8

## せ

セキュリティ サーバ 7

## て

テキスト、コピー 17  
テキストのコピー 17  
テキストのペースト 17  
デスクトップ  
    リセット 17  
    ロールバック 14  
desktop  
    切り替え 13  
    ログオフ 13  
View デスクトップカラセツダン 13  
デスクトップの切り替え 13  
デスクトップのリセット 17

デバイス、USB 25

**と**

トラブルシューティング 17

**は**

ハードウェア要件、Linux システム版 6

**ふ**

プロキシ設定 18

**も**

モニタ 16

**り**

リダイレクト、USB 25

**ろ**

ログ、USB デバイス用 25

ログオフ 13